《令和8年度　第４号》

“コノホシ”栽培情報

コ・ノ・ホ・シ

地球温暖化により始まった研究、その期間約10年。
研究現場にはこの地球（ホシ）のことを想い、汗を流す人がいた。
地球（ホシ）と米の関係を変い、研究に協力する農家の方がいた。
空と、土（大地）と、全色に輝く稲穂。
このお米は、真摯頃の人々が地球（ホシ）のことを想いながらいただく。
このホシで生まれた「米」を、脈々と引き継ぐために。

発行日　令和８年８月１４日
発　行　ＪＡ兵庫みらい
監　修　加西農業改良普及センター

今回は刈り取り前の注意事項についてお知らせします。

1. 8月中旬からは飽水管理※を徹底！

８月は引き続き気温が高く推移する確率が高いと予報もされています。

出穂１週間後から14日～20日後程度は田面が乾かないように飽水管理を徹底しましょう。飽水管理は適度な水分と酸素を供給し、根の活力を維持するのに役立つだけでなく、出穂後の高温障害による玄米の品質低下を抑制する効果が期待できます。

※飽水管理：土は乾かさずにようかん状で、足跡に水が溜まる程度で地表面には水がない状態の水管理。

2. 落水は出穂後　30日頃を目安に！

登熟時期の水管理が収量に大きく影響するので、コンバイン作業が困難にならない範囲で落水時期を遅らせ、収穫間際であっても**圃場が乾燥して白くなるようであれば走水を行い**、収量確保・品質向上に努めましょう。

８月			９月	
上	中	下	上	中
出穂期 穂揃期 乳熟期		登熟期		成熟期
水管理 湛水状態		飽水管理		落水（早期落水はしない）

3. 刈り取り時期について

コノホシの刈り取り適期は、出穂後３５～４０日を迎えた頃になります。また今後も高い気温が続く場合、収穫時期が早まる可能性があります。

刈り取り適期の判断は、葉の黄化程度ではなく、**穂の籾全体の黄化程度が８０～８５%となったときが収穫時期**となります。早刈りすると、青未熟粒が多くなり、品質・収量を悪くします。また、刈り遅れると、胴割れ、玄米の光沢劣化などの品質低下を招きますので注意しましょう。

※詳しい刈り取り適期を知りたい方は、圃場のなかで、平均的な株から草丈が一番高い穂を３～５本採取してＪＡへ持参下さい。

4. 注意すべき病害虫について

出穂後にも様々な病害虫が発生します。しっかり防除を行い、良質米を収穫しましょう。詳しい内容は裏面をご覧ください。

～連絡先～

加西営農生活センター	０７９０－４７－１２８６
小野営農生活センター	０７９４－６３－６９０５
三木営農生活センター	０７９４－８２－６１５０

【紋枯病】

前年作で発生したほ場や畔草で越冬した菌核が翌年の発生源となります。

茎の下部分から灰色の楕円形病斑が現れてきます（写真１参照）。第３葉鞘より上位の葉鞘に発病すると減収となります。また、倒伏の原因にもなります。

７～９月の高温（気温：２８～３２℃が最適）と降雨や、倒伏による株元の多湿条件が発生を助長します。

写真1　紋枯病の病斑

【ごま葉枯病】

病斑は、幼穂形成期頃から葉に特徴的なごま粒状の斑点ができ、出穂前後から葉や穂に広がります（写真２参照）。

発病すると生育が悪くなり籾が稔実しにくくなることから、収量・品質の低下に繋がります。

砂質浅耕土や老朽化水田、秋落ち水田でよく発生します。特にカリウムや鉄、ケイ酸、マグネシウムが欠乏すると多発し、窒素切れを起こした場合にも発生しやすくなります。土壌改良資材を施用し、土づくりをしっかり行うことによって根圏環境を改善しましょう。

写真2　ごま葉枯病の病斑

【トビイロウンカ】

トビイロウンカは、主に６～７月にかけて中国大陸から風に乗って飛来する水稲害虫で、発生の多い時期から「秋ウンカ」と呼ばれています。

稲にしか寄生しないため越冬はできませんが、水田内で世代を繰り返して繁殖します。稲の株元を吸汁し、坪枯れを引き起こします（写真３，４参照）。

圃場内の状況を注視し、異常があれば速やかに臨機防除剤の散布をしましょう。

写真3　トビイロウンカ

写真4　坪枯れ被害